縄文イベント情報　7月～9月

＊　詳細は、チラシやホームページ等でお知らせします。

講演会やパネル展示があるよ！入場無料！

「縄文夏まつり」

■問合せ：北海道環境生活部文化スポーツ局縄文世界遺産推進室　011-204-5168

■日　時：7月6日（木）～9日（日）
■場　所：札幌駅前通地下歩行空間　札幌駅側イベントスペース
■主　催：北の縄文道民会議、公益財団法人　北海道文化財団
■共　催：北海道縄文のまち連絡会、札幌国際大学縄文世界遺産研究室＜特別後援：北海道＞

函館市

◆ 市立函館博物館
- ＊ 夏休み自由研究「縄文土器を作ろう」　7月20日、8月10日
- ＊ 夏休み自由研究「黒曜石で石器を作ろう」　8月3日

◆ 縄文文化交流センター　※ 縄文体験講座（各種）通年、期間限定メニューあり
- ＊ 定期講座「土器づくり講座」（全2回）　7月16日、8月19日
- ＊ キッズプログラム「竪穴住居の模型づくり」　7月23日
- ＊ キッズプログラム「わくわく石器づくり」　9月17日

森　町

◆ 鷲ノ木遺跡見学会（事前予約が必要）
史跡鷲ノ木遺跡・森町遺跡発掘調査事務所　7月22日、9月2日・18日（10月7日）

洞爺湖町

◆ 縄文ロビー講座
入江・高砂貝塚館　7月8日、8月27日、9月30日（10月14日、11月18日）

◆ とうや湖縄文まつり
入江・高砂貝塚館及び入江・高砂貝塚公園　7月17日

伊達市

◆ 第20回だて噴火湾縄文祭り
だて歴史の杜カルチャーセンター・史跡北黄金貝塚公園　8月26日～8月27日

千歳市

◆ 千歳市埋蔵文化財センター
- ＊ 勾玉をつくろう　8月2日、4日、7日、10日、13日、16日
- ＊ 縄文土器をつくろう（2日間参加が条件です）　7月29日、8月12日
- ＊ 石器をつくろう　8月5日

編集後記

◎はじめまして。(^^)夏号から編集に携わることとなりました。皆様よろしくお願いします。（M.S）
◎これからの季節は楽しい縄文イベントが盛り沢山！皆さん、是非ご参加下さい！！（I.K）
◎「郭公が「カックウ」と鳴いてます。ご寄稿を頂いた皆様にお礼申し上げます。（T. H）

編集・発行：北海道・北東北の縄文遺跡群の登録をめざす道民会議　編集長　谷　紘道　編集委員　村上志保子、井上香織
TEL：011-221-1122　FAX：011-221-0117
http://www.jomon-do.org/ E-mail　ebisutan@cbt.chuo-bus.co.jp

北の縄文道民会議 Hokkaido Jomon Culture Promotion Council

HOKKAIDO JOMON CLUB NEWSLETTER

北の縄文　夏 2017　VOL.4

平成29年6月発行

目次

■北の縄文コラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
■世界遺産をめざす縄文遺跡群・・・・・・・・・・・2～3
■道内各地の活動状況／会員メッセージ・・・・・・・・4
■よもやまばなし／構成資産から／縄文トピックス・・・5
■縄文イベント情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

北の縄文コラム

縄文人の「自然との共生」

もう10年ほど前になろうか。

北海道で暮らすことになって間もなくのころ、北海道の歴史を紐解いていて、「北海道に弥生時代はない」と知った時の一種の驚愕は、鮮明な記憶として今でも強く心に残っている。また、北海道にある唯一の国宝は、道南の著保内野遺跡から出土した「中空土偶」である。このような驚きを契機として、北海道の縄文時代に対する私の関心は次第に高まっていった。

縄文時代の人々の暮らし方も考古学の成果で次第に分かってきている。その一つの特色は「自然との共生」にある。自然を畏れ、自然の恵みに感謝し、自然を壊さない縄文の人々の暮らし方は、縄文時代から続縄文時代、擦文時代、アイヌ文化時代へと綿々と引き継がれてきた。しかも驚くことに、北海道では東北をはじめ各地との交易が縄文時代から行われていた。奥尻の遺跡から勾玉が出土したり、北海道には生息していないイノシシの骨が北海道の遺跡から発掘されたりするのは、その証左ともいえる。

北海道・北東北の縄文遺跡群を「世界文化遺産」に登録しようという運動に加わらないかとお誘いを受け、即座にこれをお受けすることとした。「自然との共生」という今日的なテーマと「縄文時代」は深く結びついている。

一日も早い登録を期待したい。

北の縄文道民会議　副代表　横内龍三
（株式会社　北洋銀行　代表取締役会長）

世界遺産をめざす縄文遺跡群

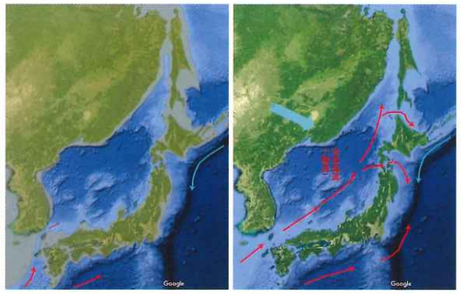
＊平成29年5月22日開催のランチタイムセミナーから抜粋

環境生活部　文化・スポーツ局
縄文世界遺産推進室　特別研究員　阿部千春

縄文文化の始まり

縄文文化が始まる前、約2万年前は氷期で海水面が120mも低く、北海道はサハリン島とつながり、アジア大陸の東に細長く伸びた半島の一部でした。その頃の人々は土器を持たず、黒曜石で作った狩猟道具を持ち、マンモスなどの大型動物と共に移動しながら北海道に南下してきました。

過去百万年を見ると、地球は10万年サイクルで、8万年の氷期と2万年の間氷期を繰り返しており、氷期には海水面が下がり、間氷期には海水面が上がります。約15,000年前に急激な温暖化が始まると海水面の上昇に伴い日本列島南端の対馬海峡が開いて暖流が一気に日本海に流れ込みました。暖流に囲まれた温暖湿潤な気候が生まれ、その気候変動に対応するように縄文文化が始まりました。



▲氷期（左）と間氷期（右）の日本列島

この地球規模の温暖化によって植物が安定的に生育するようになり、世界は農耕や牧畜によって定住生活を実現しますが、日本は生物多様性に富んだ海と森に囲まれていたためか、漁労・狩猟・採集など、自然の恵みのなかで定住生活に移行し、それが1万年間も続きました。

これまで、西アジアや中国大陸などで農耕を基に都市国家に発達した文明が優れていると考えられていましたが、こうした都市文明は大規模な戦争などによって3千年ほどで滅びることが多いのです。縄文文化は未発達で遅れた文明と思われていましたが、1万年間変わらないということもすごいということで、国内外の注目を集めています。

縄文文化の特徴と北海道の歴史

縄文文化の特徴ですが、当時は大規模な戦争がなかったようです。例えば、縄文時代の集落には防御用の柵がなく、人を殺すための専用の武器もありません。また統計的に見ると傷をうけた人骨が極めて少ない傾向にあります。

▲ランチタイムセミナーの様子

また、ヒスイやアスファルトに見られるように活発な交流・交易も行っています。アスファルトは道路の舗装工事等に使用しますが、縄文時代には接着剤として使用されていました。石油鉱床地帯の秋田、新潟あたりから津軽海峡を越えて北海道に入ってきたと考えられます。さらに漆工芸や編組製品等の製作技術も発達しており、日本を代表する伝統工芸の基礎が縄文時代にすでにあったことを示しています。

縄文文化は約2千年前に終焉を迎え、本州は弥生文化、古墳時代、飛鳥時代、平安時代と移行しますが、実は、北海道に弥生文化はありません。寒かったから稲作が定着しなかったと言う人もいますが、おそらく敢えて水田をつくって稲作をしなくても、自然のなかで充分に生活ができたのだと思います。

縄文文化以降の北海道は、続縄文文化、オホーツク文化、擦文文化、アイヌ文化と、独自の歴史文化が展開しました。今まで、縄文文化から弥生文化に発展したと学校でも教えられていますが、縄文文化と弥生文化は全く価値観の違う文化であり、北海道には本州の歴史とは異なる、もう一つの日本の歴史が流れているのです。

世界遺産登録の推進

縄文遺跡群の世界遺産登録の取り組みについて説明します。北海道、青森、秋田、岩手の4道県で登録を推進している「北海道・北東北の縄文遺跡群」は、全部で17の資産で構成されており、北海道は5遺跡（6資産）が構成資産になっています。北海道の資産について、古い順番から説明いたします。

【早期】垣ノ島遺跡（函館市）：墓の中から粘土板が17点出土しています。おそらく、亡くなった子どもの形見として足形を写し取ったものと思います。この遺跡は後期まで続き、そのなかで190m、幅120m、高さ2mの「コの字型」の盛土遺構（道具類の捨て場）がつくられています。

【前期】北黄金貝塚（伊達市）：食料とした貝や魚、動物の骨等が堆積しており、人の墓もあります。水場遺構では、石皿やスリ石の「送り」のような廃棄もあることから、人間は勿論、動物、植物、そしてモノにも魂があると考えていたようです。

▲北黄金貝塚（伊達市）

【中期】大船遺跡（函館市）：深さ2.4mの大きな竪穴住居があるなど、縄文時代の安定した定住を示しているほか、遺跡から、クジラ、オットセイ、マグロの骨など、海の恵みに由来した食料が大量に出土しています。

【後期】入江貝塚（洞爺湖町）：墓から腕や脚の骨が非常に細い人骨が発掘されています。ポリオに罹り自分では立ち上がれない状況のため、集落のなかで介護されながら命を全うしたのだろうと考えられています。

【後期】キウス周堤墓（千歳市）：最大のもので、直径75m、比高差5mもある巨大なドーナツ状の土塁をまわし、その内側に集団墓地がつくられています。複数の周堤墓が組み合わされており、縄文時代の複雑な社会構造を反映します。

【晩期】高砂貝塚（洞爺湖町）：寒冷化に伴い地下水位が今より下がるのですが、この貝塚も海岸部に近いところに形成されています。貝塚から人骨や様々な土製品が出土しています。

【関連遺跡】鷲ノ木遺跡（森町）：高速道路工事中に発見された直径40mを超える環状列石です。景観に課題があるとして関連資産となりましたが、今後は史跡整備を進めながら追加登録を目指し、構成生産とともに活用を図っていきます。

土偶と縄文文化の評価

この土偶は、函館市の南茅部地域で、地元の主婦が農作業中に偶然発見したものです。中が空洞に作られているので「中空土偶」と呼ばれています。

▲中空土偶（国宝）

多くの土偶は壊れて出土します。この土偶も腕と頭の飾りがとれています。CTスキャンで診ると、形のいい箇所で壊れるように意図的に作られていることが分かりました。破壊は死を意味し、それが次の命の再生につながるという意味があるのだろうと思います。

昨今、縄文文化に対する関心が高まっています。経済成長が続いた時代には、農耕社会を支えた弥生的な効率優先の考え方や組織のあり方が求められ、そして現在の成熟した社会には、縄文時代の自然観や多様な価値観を大切にするネットワーク型社会、といった考え方が求められているのだと思います。

海外の研究者も縄文文化に注目しています。米国の科学雑誌「ナショナル・ジオグラフィック」では北海道の縄文文化とアイヌ文化に高い関心を寄せていますし、昨年パリのユネスコ本部で行った縄文文化と世界遺産のPRでは、縄文好きなフランス人で大賑わいでした。

世界遺産登録をめざして

もしも、幸いにも登録となれば、来訪者のなかでもインバウンドが急激に増えるという世界遺産の特徴があります。現在、北海道では、この世界遺産登録を地域づくりの核にしていこうと取り組んでいます。ただ、世界遺産の構成資産は道南と道央の6資産だけです。今後は道南から道央そして道東、道北へと、いかに来訪者を誘導するかが課題ですし、縄文遺跡だけでなく、地域の自然、歴史、文化、今につながる食文化というものを一つの地域の魅力として磨き上げながら、地域間を繋げていくということが求められると思います。

ただ、世界遺産登録は、観光振興や地域振興だけが目的ではなく、縄文的な価値観、例えば「自然に感謝する」ということ、あるいは「全ての命を尊ぶ」ということなど、私たちが縄文文化を通して学び、伝え、社会にどれだけ浸透させていけるか、きちんと次の世代につないでいけるか、ということに本当の意味があると思っています。